

特別寄稿

昭和農業技術の原型（かたち）をつくった寺尾 博

西尾 敏彦

一度だけお会いした寺尾博先生

もうずいぶん昔のことだが、一度だけ寺尾博先生にお目にかかったことがある。大学を出たばかりのわたしが四国農業試験場（香川県善通寺市）に就職してまだ日も浅いある日のこと。当時先生は農電研究所の顧問をしていて、電熱育苗器のPRのために来場された。わたしがお目にかかったのは、先生が場長室で一服していたときで、嵐嘉一場長に呼ばれて担当試験の説明をしたのだが、先生はうなずきながら、あまり興味を呼びそうにないわたしの説明を聞いてくださった。当時の試験場にはまだ先生に叱られたり、しごかれたりした研究者が大勢いて、彼らから〈とんでもなくこわい先生〉と聞かされていたが、わたしには品のよい老学者という印象しか残らなかった。



農事試験場長時代の寺尾博先生
『農業技術研究所八十年史』より

日本農業、わけても稲作技術に関係をもつ人なら、どこかで寺尾先生の研究のお世話になっているに違いない。その寺尾先生が亡くなられて、もう半世紀になる。わたしはお目にかかったことがあるが、もうすっかり歴史上の人物である。ここからは歴史上の人物らしく、尊称を失礼して書きつづけることにしよう。

秀才の誉れが高かった青年時代

寺尾博は明治16年（1883）に静岡県有渡郡聖一色村（現在の静岡市）の旧家で生まれた。父親の昇太郎は有名な養蚕農家で、各種役員を歴任し、農業振興にも大きく貢献した地元の名士であった。寺尾はその血を受け継いだからだろう。幼いときから秀才の誉れが高く、静岡中学を卒業すると、日本一の名門校、

旧制第一高等学校にまっすぐ入学するが、このころからすでに農学志望であったという¹⁾。

寺尾はしかし、旧制高校時代から自然科学全般に興味をもつ幅の広い学生であった。2年生の夏休みには、友人の^{おおしまひろし}大島廣（のちの九州帝国大学教授、水生動物学の権威）を誘って、甲州から信濃路にかけて鉱物採集の旅を楽しんだという²⁾。のちに農業技術研究をリードした寺尾の広い学識は、このころから培われていたのだろう。

第一高等学校卒業後はまっすぐ東京帝国大学農科大学（現在の東京大学農学部）へ進学した。農科大学では抜群の成績で、卒業時には恩賜の銀時計を授与されている。

「ツバメ旦那」の「陸羽132号」育成

明治42年（1909）、東京帝国大学農科大学を卒業した寺尾はただちに東京府滝野川村西ヶ原（現在の東京都北区西ヶ原）にあった農商務省農事試験場に採用された。

農事試験場での寺尾は、最初から幹部候補生として囑望されていたのだろう。ふつう大学卒は1年後に技師に就任し、地方の支場に配属されるのだが、彼だけは本場にとどまり、2年後に併任で陸羽支場に赴任している。ただし支場勤務は水稻が栽培される夏の期間だけ、冬はもっぱら本場勤務で、町の人々は寺尾のことを「ツバメ旦那さん」と呼んでいたという³⁾。ちょうど東北各地に冷害が頻発していた時期である。陸羽支場で寺尾に科せられた仕事は、いうまでもなく耐冷性品種の育成であった。

ちなみに、このとき寺尾の助手に抜擢されたのが、^{にべとみのすけ}仁部富之助であった。仁部はもともと野鳥観察が趣味で、地元の農学校を卒業すると陸羽支場に就職し、養畜部に勤務していたのだが、寺尾の着任とともにその資質を買われ、種芸部に配置換えされた。のちに「日本のファール」といわれた仁部の天賦の才は、このときの寺尾との邂逅をきっかけに開花したといわれる⁴⁾。

陸羽支場で、寺尾が最初に取り組んだのは、当時わが国に紹介されたばかりの純系分離法による品種育成であった。純系分離育種法とは、稲のような自殖性作物の在来種のなかからすぐれた特性をもつ個体を選び、その後代系統から淘汰選抜していく方法である。わが国では明治43年（1910）の愛媛県農事試験場を嚆矢として全国の各道府県農事試験場がほぼ一斉に着手しているが、寺尾も着任翌年の明治44年（1911）にこの方法で「^{りくう}陸羽20号」などの育成をはじめ

ている。当時農事試験場では畿内支場の加藤茂苞が交配育種、陸羽支場の寺尾が純系淘汰という分担があったらしい。

寺尾がのちに「陸羽132号」となる耐冷性品種の交配育種にとりかかったのは、大正3年（1914）のことである。交配親は前述の「陸羽20号」と、この地方で広く栽培されていた「亀ノ尾」で、「陸羽20号」の耐冷性・耐いもち病性と「亀ノ尾」の耐冷性・良食味性、両者の長所を活かそうというのが交配のねらいであった。

わが国における人工交配育種の歴史は明治37年（1904）にはじまるから、寺尾にとっても交配はほとんど初体験に近い状況であったろう。真夏の温室で汗だくになりながら、仁部と2人で交配したというが、得られた種子はわずか2粒。さいわい2粒は無事発芽し、以後世代を追って選抜を進めることができた。

「陸羽132号」は大正10年（1921）に育成された。育成に8年を要しているが、寺尾は交配の2年後に陸羽支場を去り、2年間アメリカに留学しているから、以後の育成実務はおもに仁部を中心に進められたとみるべきだろう。寺尾も「筆者の僚友であった技手仁部富之助及びその他の人々が（中略）異常な苦心と努力を用い」と述べ、仁部を含む共同研究者たちに謝意を表している⁵⁾。ちなみに「陸羽132号」の育成にかかわった仁部以外の研究者には、寺尾の後任の永井威三郎、後期世代の生産力検定を担当した岩淵直治・稲塚権次郎らがいる。

「陸羽132号」はその後、全国の寒冷地に広く普及していった。昭和10年代中期には、東北地方を中心に最高23万²畝まで達している。昭和4～27年（1921～52）の間の24年間、東北稲作の首位を占め続けたことからみても、この品種の実力がわかる。当時、日本統治下にあった朝鮮半島でも普及し、終戦直前には最高22万²畝が栽培されていた。

生態育種の発想と「指定試験事業」

2年間のアメリカ留学を終えて帰国した寺尾は大正9年（1919）、前任者の安藤廣太郎あんどうひろたろうの場長昇任を受け、農事試験場種芸部長に就任する。大正12年（1923）には種芸部の圃場が埼玉県鴻巣町（現在の鴻巣市）に移設されたので、鴻巣試験地主任も兼務した。昭和16年（1941）には農事試験場長に就任するが、19年までは種芸部長・鴻巣試験地主任を兼任していたので都合25年間、主要農産物技術開発の陣頭指揮をとっていたわけである。戦争が激化し、冷害が頻発した未曾有の時代のことである。彼に委ねられた責任と権限は、今では想像できないほど絶大なものであったろう。

種芸部長時代の寺尾の最大の業績のひとつが「指定試験事業」の創設である。ちょうど彼が手がけた「陸羽132号」が東北を中心に普及しはじめた時期である。もともと大学時代から育種に興味をもっていた彼だが、「陸羽132号」育成の経験と自信が、彼の育種熱をさらに助長させたことは間違いない。国・公立を問わず、全国の試験場を研究ネットでむすんで主要農作物の品種改良を推進しようという「指定試験事業」は大正15年（1926）、その寺尾の構想によって創始された。

指定試験事業といっても、知らない人も多いただろう。だが、水稻の「農林1号」からはじまって「コシヒカリ」「ひとめぼれ」「ヒノヒカリ」、小麦の「小麦農林10号」や「ホクシン」、大豆の「エンレイ」、サツマイモの「沖縄100号」など。畑作物、牧草、野菜、ぶどう、びわ、チューリップ、ゆりと、われわれが食べ、楽しむおもな農作物の品種がこの事業から生まれていたといえ、わかってもらえるだろう。

指定試験事業では全国をその土地の気象・土壌などに応じて、いくつかの生態区に分け、それぞれに試験地を設ける。「現場こそが唯一の技術開発の場」とする、世界に類をみない構想だが、国の農業試験場ではカバーできない地区については、そこに位置する道府県試験場に助成して試験を分担してもらう。世界に例をみない生態学的な立地まで配慮したこの育種体制の発想には、陸羽支場で過ごした寺尾の体験が活かされていたのだろう。

品種改良以外でも、いもち病の予察、沖縄のミバエ根絶などの病虫害防除、泥炭地、酸性土壌などの改善などで指定試験事業が生み出した傑作技術は多い。大正15年（1926）に発足し、平成22年（2010）に84年間にわたる長い歴史を閉じたが、これら成果のわが国農業への貢献は大きく、今後も長くつづいていくに違いない。

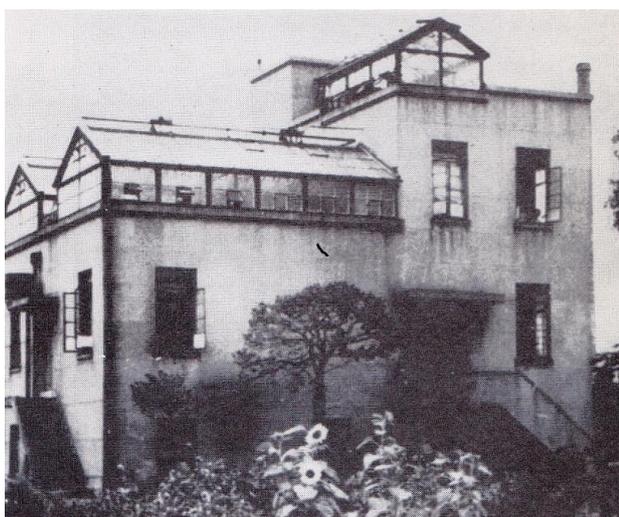
かがやかしい研究成果とは別に、指定試験事業が残した成果に、国・公立研究機関の研究者同士の仲間意識の醸成があった。夏の立毛検討会、年度末の成績検討会に、全国から集まった研究者が、昼は検討会場で夜は宿舎で、連日闘わされた意見交換は、帰任後の研究のつぎの発展に大きな力となった⁶⁾。ときにはきびしい意見の交換もあったが、そこで生まれた研究者間のむすびつきは固い。国・道府県を問わず、会議での縁を頼りに、遠く離れた研究者間でも情報や材料の交換がスムーズに行われるようになった。まだメールはおろか、電話も発達していなかった時代のことである。これこそが、寺尾が創設した指定試験事業の最大の成果であったといってもよいだろう。

大冷害が契機となった生態生理研究の強化

昭和農業の幕開けは、昭和3年(1928)から6・9・10年とつづいた北日本の大冷害からはじまった。とくに昭和9年は「娘の身売り」が社会問題化した未曾有の大冷害であったが、「陸羽132号」とその育成者である寺尾の名が全国に知れわたったのもこの年であった。連日のように、新聞に冷害の記事が載り、これに対抗できる品種として「陸羽132号」と、その育成者の名が載ったからである。

昭和9年10月21日の東京朝日新聞は「最善の凶作対策」として寺尾の写真をかけ、「寺尾博士の研究業績、陸羽132号」という4段抜きの記事を掲載した。凶作地の現地調査の結果、それまでの主力品種「亀ノ尾」「愛国」が壊滅的な被害を受けるなかで、ひとり「陸羽132号」だけが被害が少なかったというのである。ときの農林大臣も「寺尾博士こそは今回の凶作におけるもっとも偉大な功績者で、今回だけでも何千万円の被害額を免れたことは否定できない。銅像の1つ位は建っても良いくらいだ」と激賞している。もっとも寺尾自身は「あれはいささか迷惑ですよ。いったい作物の品種改良、育種事業というものは、たった一人の人間の力で出来るものではありません」と、陳弁につとめているのだが.....

ともあれ連日のこうした新聞記事によって、それまで農業に無関心であった国民の目が農業と農業技術に向けられるようになったのはたしかである。農業技術に冷淡であった財務当局が12万円という当時としては破格の予算を計上し、冷害対策研究を支援するようになったのも、この効果だろう。農事試験場種芸部長の地位にいた寺尾がこのチャンスを活かさぬはずはない。稲作研究はここから、寺尾の強力な指導のもと、育種だけでなく、生態生理など基礎的研究分野でも拡充強化されていった。



世界初の冷害実験室の建設と水稲冷害生理の研究

拡充強化の第1弾は、もちろん

世界初の人工気象室 農事試験場冷害実験室
『農業技術研究所八十年史』より

冷害研究であった。冷害対策研究の企画にあたって、寺尾が立てた柱は2つ。ひとつは東北6県に農商務省指定の凶作防止試験地を設置、これに農事試験場東北支場（大曲）・東北小麦試験地（盛岡）を併せて水稻の耐冷性品種の育成と冷害対策技術の開発に当たさせたこと。もうひとつは、西ヶ原の農事試験場構内に冷害実験室を設け、冷害生理の解明に当たることであった。いずれも寺尾が中心になって推進されたが、とくに彼が力を入れたのは後者、世界初の人工気象室による本格的な水稻生理研究のスタートであった。

冷害実験室は昭和10年（1935）に建設された。世界初のファイトトロン（人工気象室）で、屋上に温度制御ガラス室2棟4室、地階に暗室2室を有する地上3階・地下1階という画期的な大型施設であった。冷暗室では、最低12℃までの温度管理が可能で、翌年から大谷義雄^{おおたによしお}・近藤頼巳^{こんどうよりみ}らの研究チームが実験に当たった。

今でこそ、あちこちの試験場に建設されているが、この種の研究施設が誕生するのはアメリカでも1930年代になってからである。寺尾の先見性を示すものだろう。

「水稻冷害の生理学的研究」と名づけたこの研究は、わが国におけるはじめての本格的栽培生理学的研究だが、昭和11年（1936）から5年間にわたり研究がつづけられた⁷⁾。後述する精密試験法で均斉に育てたポット栽培の水稻を生育時期別に低温にさらし、器官・組織の低温抵抗性を調査した結果、出穂前24日頃の穎花分化期と14～10日の生殖細胞形成期に低温被害に弱い時期があることが明らかになった。同じ時期に東北小麦試験地で柿崎洋一^{かきざきよういち}らが行った試験とともに、水稻の冷害機作を解明した世界初の画期的な研究成果である。寺尾はこの研究によって、のちに学士院賞を受賞している。

あだ花におわった「栽培条件の相対性研究」と「精密栽培試験法」

陸羽支場・本場時代を通じて、寺尾が主導した研究はいずれもかくかくたる成果をあげたが、1つ（正確には2つ）だけ、首をかしげる研究がある。昭和5年（1930）から多くの研究員を動員し精力的に進められた「栽培条件の相対性の研究」と、よくこれと混同されるのだが、これに密接に関連してやはり寺尾が創始した「精密栽培試験法」である。

水稻を栽培する場合、栽培時期、播種量、田植期、栽植密度、耕起深度などの栽培条件のどれかが変化すると、関連して他の要素も変動する。これが寺尾のいう「栽培条件の相対性」だが、これ自体は昔から経験的にもよく知られて

きた現象である。明治になって近代農学が導入されると、多くの研究者がこの相対性の法則性解明に興味をもつようになるが、寺尾も彼が創始した「精密試験法」を武器にこれに挑んだ。

まず精密試験法だが。担当した近藤頼巳らによると、精密試験では「出来得る限り精密な操作によって小規模の実験を行い、努めて均質な少量の材料について綿密な調査を遂げ、確実かつ精密な試験成績を得る事によって供試条件に関する生態学的理論を明らかにしようとした」⁸⁾ という。具体的には、可能な限り斉一に生育を揃えた少数の個体を、周到な管理のもとにコンクリート枠か木枠で栽培する。枠は地面に埋め、枠内の土は層別にフルイにかけて十分に混ぜ、肥料や堆肥も細かく砕き、細心の注意を払い均一に散布した。播種には播種板を用い、芽出した種子を1粒ずつ、芽の向きまで揃えて等間隔に播種する。移植は植痛みを防ぐため原則として夜間に行い、葉令や分けつ数を揃えた苗を一定深さになるよう特製のピンセットを用いて植えた。

今では考えられない超集約的な試験方法だが、地力のムラをなくし、個体間の誤差を限りなくゼロに近づければ、処理の差が明確に把握できると考えたのだろう。ちょうどこのころ欧米から、微量のサンプルでも正確な分析結果が得られる「微量分析法」が紹介されたが、寺尾はこれにヒントを得て、微量栽培試験法つまり精密栽培試験法を思いついたといわれる。当時すでに欧米では数理統計学的方法が開発され、わが国にも紹介されていた。勉強家の寺尾がそれを知らなかったはずはない。十分知っていて、これと真逆な精密試験法こそ栽培法研究の決め手と考えていたのだろう。

栽培条件の相対性研究はこの精密試験法を武器に、昭和7年（1932）から6年間にわたり、多くの研究者を動員して精力的に進められた。試験を担当した戸荻義次（のちの東京大学教授）によると「早植には若苗・多肥・粗植・深耕・長方植が、晩植するに従い熟苗・少肥・密植・浅耕・正方植が適する傾向」⁹⁾ が得られたとあるが、とても目標の「生態学的理論」の解明がなされたとは思えない。戸荻も「圃場試験に於て栽培条件による生育差を確認することの困難さ」を実感したと告白し、「1938年に打ち切る」と述べており、この研究が従来の経験則を超えた相対性の理論解明にはほど遠い結果で終わったことを匂わせている。「ついに收拾がつかず、たんに農事試験の複雑さをしめしたにすぎなかった」とみた¹⁰⁾ が川嶋良一の見解が妥当に思える。

寺尾も研究の成果に見切りをつけたのだろう。以後、相対性についての報告はいっさいない。相対性研究が打ち切りになれば、精密試験も必要なくなる。

戸荊は精密試験法についても、肥料や堆肥を細粒化することで肥効が早期にずれ通常栽培と異なることなどをあげ「精密に取り扱えばよいというわけにはいかぬ」と述べている。けっきょく、相対性研究も精密試験も研究者仲間の語り草にはなったが、戦後は数理統計の普及とともに姿を消していった。

とはいえ、精密試験法がまったく無意味であったということではない。よく生育のそろった材料は生育過程の追跡に好都合で、前述の冷害生理の実験などにその後も全国の試験場で広く活用された。また、この研究で水稻の生育をじっくり観察した研究者のなかから、のちに内部形態研究で名をなした長重九^{ちやうじゅうきゅう}、V字稲作の松島省三^{まつしませいざう}などが生まれ、戦後の稲作診断技術の発展に大きく貢献した。とかく統計処理のための数字を得ることだけに夢中で、生育の観察を怠りがちな欧米型研究と異なり、観察を重視し、発育段階を追って作物の生育に徹底的に向き合う日本型農業研究はここからはじまったといえる。

資料解析で明らかにしたサツマイモの交配不和合性

寺尾の研究には水稻を対象としたものが多いが、大小麦、大豆、ペチュニアなどについても研究を行っている。昭和9年（1934）に発表されたサツマイモの交配不和合群の発見は草創期のサツマイモ育種研究の金字塔として今日も語り継がれている。

熱帯原産のサツマイモは沖縄県を除くわが国の自然条件下では花が咲かず、種子もとれない。だがその沖縄でも、どう交配しても種子がとれない品種の組み合わせがあった。これが「交配不和合性」だが、寺尾は大正3年（1914）から実施されている沖縄県農事試験場の人工交配試験の資料を詳細に検討し、世界ではじめてサツマイモにA・B・Cの3群の交配不和合群が存在し、これら同一群内の品種間では交配ができないことを明らかにした¹¹⁾。この研究がその後のサツマイモ育種研究の発展に大きく貢献したことはいうまでもない。

ちなみに、沖縄県のサツマイモ人工交配試験は大正3年に世界のトップを切って実行されたものだが、寺尾はその資料をいち早く利用したわけである。また交配不和合群についての研究は戦後も後輩たちに受け継がれ、今日ではA群からP群まで16の交配不和合群が存在することが明らかにされている。

寺尾博の築いた農事試験場

太平洋戦争が勃発した昭和16年（1941）、寺尾は長年にわたりもっともよき理解者で支援者でもあった安藤廣太郎場長のあとを受け、種芸部長兼任のまま、

第4代農事試験場長に就任した。じつは昭和14年からはこの年創立された東北帝国大学農学研究所の初代所長を兼任、2年後には同大学教授としても学生の指導に当たってもいた。種芸部長・鴻巣試験地主任の兼務が解かれたのは昭和18年だから、この期間は場長・部長・試験地主任、さらに大学教授を兼ねていたわけである。

寺尾場長の仕事はそれだけではない。戦争末期には、本省に協力して増産督励のため職員を農村に派遣すること、爆撃で焼け出された農林省本省業務の一部を受け入れること、研究と職員を守るため、支場へ疎開を敢行することなどもあった。昭和19年（1944）の1月から3ヶ月間は、軍の要請に応えみずからマレー・インドネシアに赴き、稲作指導にも当たっている。とてつもなく忙しかったに違いない。

種芸部長時代・場長時代を通じて、寺尾がもっとも意を注いだのは、それまでもすれば近代科学と無縁であるとされてきた農業技術に、最新の遺伝学や生理・生態学などの知見を導入し、科学的な農業技術に仕立てあげることであった。彼の指導を受けて、農事試験場を中心に進められた品種生態や冷害生理の研究成果は、戦後作物診断技術として食糧増産に貢献し、さらに東南アジアに派遣された稲作研究者を通じて各国の稲作改善にも役立っている。昭和農業技術の原型（かたち）をつくった最大の功労者は寺尾博であるといつて過言でないだろう。

彼が意を注いだもうひとつに研究者の資質向上がある。たいへんな勉強家で、海外の新学説、ガーナーとアラードの光周説、トレッセンの種生態学、ルンデゴルドの環境適応説などつぎつぎとものにし、機会あるごとに若い研究者にレクしていた。海外情報など、なかなか得られなかった時代のことである。彼が著した『植物育種学要説』（岩波書店）は当時の学生に広く愛読された。

昭和20年（2045）8月、日本は太平洋戦争に敗れ、無条件降伏した。翌年、寺尾は農事試験場長の職を辞した。戦争中、要職にあった役人の多くがそうであったように、組織の長としての責任をとっての辞任であった。

農業技術者としての寺尾の活動はしかし、ここで終わったわけではない。退職直後に勅選の貴族院議員に任ぜられ、引きつづき参議院議員に当選、国政サイドから農業と農業技術の振興に尽力した。昭和25年（1950）の第2回選挙では落選しフリーになるが、ここからの彼の農業への貢献は、むしろ試験場時代をしのぐものであった。

田植機時代の仕かけ人

ところで、20世紀におけるわが国農業最大の技術革新は稚苗田植機の発明ではないだろうか。稚苗田植機は昭和40年（1965）、民間の電気技師関口正夫^{せきぐちまさお}によって発明されたが、その道筋をつくったのが寺尾であることは意外に知られていない。

話は昭和29年（1954）ころ、寺尾が当時長野県農業試験場雪害試験地（飯山市）にいた松田順次^{まつだじゅんじ}と出会ったときからはじまる。福井県で開催された稲作試験検討会に、当時ビニール農業研究会会長であった寺尾も出席していたが、その席で松田が考案したばかりの「室内育苗法」について発表したことがきっかけになった。室内育苗法で育てた稚苗を直接本田に早植することで増収するという報告だが、当時の稲作常識から大きくはずれていたため、これが寺尾の怒りを買った。「そんな小さい苗が良いなんて、君は種芸を研究する資格がない」とまでいって、松田を罵倒したという¹²⁾。当時、多収を得るためには、健苗を葉齢4～5歳の成苗にまで育てあげることが必須であると考えられていたからである。

寺尾に罵倒された松田は、心ならずもいったん引き下がる。寺尾の指示にしたがって、箱育苗で育てた稚苗をさらに苗代に仮植することを考え、その効率的な移植法として育苗箱にビニールフィルムを折り込み、土と根が短冊状に連なる「帯苗」をつくることを考えたのである。「飯山方式」と名づけられた育苗法がそれだが、当時、農電研究所の顧問であった寺尾は、これを同所開発の「電熱育苗器」とセットにして、全国を普及奨励して廻った。

飯山方式はしかし、ほとんど普及しなかった。紹介された普及所や試験場では、寺尾推薦の「飯山方式」区の対象に稚苗直植区も設けたのだが、なんと対象区のほうが多収になったからである。寺尾のメンツは丸つぶれ。だがここからがさすがに寺尾であった。改めて飯山の松田を訪ね彼の試験に接し、地元の農家とも話し合ううちに自説の過りに気づき、方針を180度転換した。めんどろな仮植苗の再移植でなく、稚苗直植イッパツ、しかも機械植をめざしたのである。

電熱育苗器で育てた斉一な帯苗を直植するとなれば、とうぜん田植機が連想される。じつはそれまでも、いくつかの農業機械メーカーが田植機を試作していたが、いずれも慣行の成苗に固執し苦闘していた。成苗は大きさが不揃いで根がからみやすく、機械での分苗がうまくいかない。なにより苗とりに時間を要する。その点、稚苗帯苗なら問題がない。そこで稚苗用田植機の開発となる

が、ここでも寺尾の存在が力になった。今日、日本中で活動する稚苗田植機の第1号は寺尾が目をつけた農電研究所出入りの電気技師関口正夫せきぐちまさおによって発明されたからである。

関口は寺尾とえらく気が合ったようだ。農業にはずぶの素人だが、もともと機械いじりが好きなこの若い技術者に、寺尾は田植機開発の夢を語り協力を求めた。「関口君、この機関銃の弾帯のように揃った苗を使って、植えつけできる田植機がなんとかできないものだろうか」。はじめは尻込みしていた関口だが、寺尾の情熱に負け、やがて田植機づくりにとりかかった¹³⁾。

昭和37年(1962)、関口の人力1条用稚苗田植機が完成する。昭和40年(1965)には、カンリウ工業(長野県塩尻市)から「農研号」の名で売りに出された。長い間農家が待っていた本格的田植機の誕生である。だがその晴れの日には寺尾はいなかった。すでに亡くなっていたのである。

関口の人力1条田植機からはじまったわが国の機械移植稲作は、その後急速に普及し、今ではわが国稲作のほぼ99%が田植機移植に変わった。松田の考案した室内育苗法も、帯苗からばら播きに変わったが、今では田植機に欠かせ存在として日本中の農家に重用されている。いずれも寺尾の協力があつてはじめて実現したもので、関口も手記のなかで「今思えば、稚苗田植機の開発という農耕法の大改革は寺尾博博士の情熱が生み出したようなものです」と、感謝を表している¹²⁾。生涯を稲作近代化にかけた寺尾の夢は、このとき実現したといつてよいだろう。

寺尾博をめぐる毀誉褒貶

寺尾について語る以上、彼の周りに飛び交った毀誉褒貶にも触れないわけにはいかないだろう。あまりにも頭脳明せきで行動的な上司をもつと、部下はなかなかついていけないものである。寺尾と部下たちの関係もそれであった。

「独善的、直情径行」などなど。「ずば抜けて頭がよい、勉強家、アイデAMAN」などと、寺尾を高く評価した人の同じ口から、こうした声も聞こえてくる。きつい言葉を好む人らしく、「農事試験場に経営研究などいない」といわれた経営研究者や「米屋の番頭になるのか」と冷やかされた農機具研究者もいた⁶⁾。農業研究への数理統計手法の導入が戦後にまでずれ込んだのも、寺尾が精密試験法に固執したからだともいわれている。よい意味でも悪い意味でも、印象に残る人だったのである。

ここまでなら内輪の話ですまされるが、寺尾にとっての不幸は、ある有名週

刊誌に彼を誹謗する記事がのったことである。指定試験事業で育成され、戦後食糧危機の救世主となった有名な「水稻農林1号」の育成者並河成資^{なみかわしげすけ}をたたえた記事だが、返す刀で、彼が自死した原因を寺尾に会議の席で叱責されたせいとする記述があった¹⁴⁾。たしかに農家に奨励品種を推薦する試験成績会議は真剣である。試験成績はきびしく評価され、きつい言葉も飛び交ったものだが、噂も外に出て活字になると真実味を帯びてくる。並河を試験地主任に抜擢し、栄光の「農林1号」育成のお膳立てをしたのも、寺尾であったはずなのだが。

もちろん寺尾を敬慕する人も多い。陸羽支場で寺尾のもとで「陸羽132号」を育成した前述の仁部富之助は、彼の著書『野の鳥の生態』のはしがきで、「私が野の鳥にとくに親しみをおぼえるようになったのは、大正の初めごろ（中略）当時、農林省農事試験場陸羽支場、種芸部主任であった農学博士寺尾博先生が公務の余暇に稲作と密接関係ある鳥類、なかんずく雀の生態学的研究を許され、しかもその方法を示教せられたのがそもそもの始まりである」と記し、謝意を表している⁴⁾。

陸羽支場にはほかにも、寺尾との出会いを機に才能を伸ばした人が多い。当時同支場には仁部と同じ学歴の助手に柿崎洋一^{たかはししげる}、高橋茂^{おおくろとみじ}、大黒富治がいた。柿崎はのちに世界初の野菜（ナス）のハイブリッド品種を育成、わが国水稻冷害生理研究の草分けとしても著名で、寺尾の指導で博士号も取得した。高橋は岩手県農試膽江分場長となり、有名な「江刺金札米」誕生に貢献した。大黒は秋田県農試技師になり、アララギ派歌人として名高い。寺尾が持ち込んだ学究的雰囲気^{きんぐう}が彼らを奮起させ、大成の道にいざなったのだろう。彼らの間で寺尾は「おやじさん」と呼ばれ、敬愛されていたという。

これはわたし自身の見聞だが、飯山の農家にも寺尾は慕われていた。しばしば飯山に赴き、いつも松田や地元農家の意見に耳を傾けていたそうで、「寺尾先生にはいろいろ教えていただいた」という農家が多かった。田植機の発明者関口正夫も、会うたびに「寺尾先生のおかげです」を連発していた。

農事試験場時代の寺尾の愛弟子の近藤頼巳（のちの東京農工大学教授）は、寺尾についてつぎのように述べている⁶⁾。「寺尾先生にははっきりしていることが、他の人にはよくのみこめないとか、わかりにくいというようなことで厳しさが感ぜられたのじゃないか。情も深い人で、涙もろい点もおありになった。ただ、情よりも知のほう^{ちのほう}がきわだって鋭かったのかも知れません」

なにしろ大正から昭和初頭にかけての戦争がつぎつぎに起こり、冷害など自然災害が頻発した激動の時代のことである。その4分の1世紀にわたり、技術

開発の舵取りを担った寺尾の長期政権に、まったく歪みがなかったとは考えられない。彼に向けた毀誉褒貶の多くは、あの時代にあの立場にいた男の、だれかが通らなければならなかった時代の道だったのであろう。歴史は後出しじゃんけん、先人はいつも分が悪い。後世の批判はさておき、わが国農業技術、わけても稲作技術の歯車を大きく前に動かした最大の功績者が寺尾であることを否定する人はいないだろう。明治のはじめに泰西農学を受け入れ、伝統農業との融合をはかってきたわが国農業技術が、真に科学的な技術といえるようになったのは、昭和の中期からである。その昭和農業の〈かたち〉をつくった人こそ、ほかならぬ寺尾博であった。

昭和38年（1961）年、寺尾は77歳で亡くなった。いつものように自宅で畑仕事をしていた、休憩中の突然の死であったという。お墓は故人の遺志で生家に近い富士山の見える丘に建立された。法名は「徹證院直心博道居士」、生涯を農業技術の進歩に徹し、怒濤の時代をまっすぐに生きた彼にふさわしい命名である。

引用・参考文献

- 1) 静岡県東豊田村『東豊田村郷土誌』1980年。
- 2) 大島廣「寺尾博君の追憶」『採集と飼育』24巻6号、1962年。
- 3) 東北農業試験場『大曲100年の研究とおもいで』東北農業試験場、1996年。
- 4) 仁部富之助『野の鳥の生態』大修館書店、1979年。
- 5) 寺尾博「水稻冷害の概観」『農業と経済』1巻9号、1931年。
- 6) 農業技術研究発祥之地記念碑建立事業協賛会『農業技術を支えてきた人々』農業環境技術研究所、1986年。
- 7) 寺尾博ほか「水稻冷害の生理学的研究」農事試験場臨時報告、1940年。
- 8) 近藤頼巳・白木実「水稻の精密試験法（1）」農業及園芸18巻7号、1943年。
- 9) 戸苺義次「学説への対応」『農業試験研究一世紀記念事業の記録』、農林水産技術情報協会、1998年。
- 10) 川嶋良一『農業技術研究の原点を求めて』農業技術協会、1986年。
- 11) 寺尾博「甘藷の品種に於ける交配不稔群」『農業及園芸』9巻、1934年。
- 12) 松田順次「水稻の室内育苗技術の創案」『農業技術』30巻5号、1975年。
- 13) 関口正夫「田植機ができるまで」『農機新聞』平成8年3月5日号。

14) 並河顕彰会編『農林一号と並河顕彰会』1963年。

なお、本稿を草するにあたり、貴重な資料を提供していただいた静岡市の増井喜彦氏に、心からの感謝の意を表したい。